筑紫女学園大学リポジト

Issues regarding Koyo Sasaki's biography (Part 1) : Including an introduction to Sasaki's works and Seinoshin Mitsui's "Sasaki Koyo sensei den"

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2015-10-13
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 桐島, 薫子, KIRISHIMA, Kaoruko
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/487

佐々木向陽の伝記に関する諸問題（1）

―著述類・三井誠之進『佐々木向陽先生傳』の紹介を含む―

桐　島　薫　子

Issues regarding Koyo Sasaki's biography (Part 1):
Including an introduction to Sasaki's works and Seinoshin Mitsui's "Sasaki Koyo sensei den"

Kaoruko KIRISHIMA

はじめに

長崎出身で、後に宇部領主福原氏の郷学「菁莪堂」の学頭となった佐々木向陽（一八〇一～一八六三年）は、『蒙求』学習のためにさまざまな工夫を施した『標疏箋注蒙求校本』（本稿では標疏本と称する）を著した。(注1) 佐々木向陽に関する先行研究は管見するところ、以下の①～㉖がある。この内、伝記の詳細や標疏本以外の著述類の記録は郷土史研究に拠る所が大きく、内容の相違により、次の二系統に大別することができる。(注2)

第一、②の系統

第二、④⑨⑭⑮の系統（⑯⑳㉔㉖が踏襲）

また、⑰⑱は伝記にも言及しているが、主に佐々木の前名（勝木か直木か）の考察を行っている。

①『日本教育史資料』三「巻九郷學諸藩之部・舊山口藩家老福原氏（越後）厚狭郡中宇部村學校」（文部省編、明治二十三～二十五年）

②三井誠之進『佐々木向陽先生傳』（大正三年七月十日三井誠之進寄贈、山口県立山口図書館蔵）

③山口県教育会編纂『山口県教育史』上（大正十四年）

④「大宇部」「宇部先輩人物伝2佐々木向陽」（昭和十二年十二月十日。記事の終わりに「この篇、田中岬小學校長の調査に據る所多し」と有る。「田中岬小學校長」は田中喜市校長。

⑤「大宇部」「宇部に於ける著述解題1爭鹿稿」（昭和十二年十二月十日）

⑥「大宇部」「宇部に於ける著述解題3錫類集」（昭和十三年二月十日）
⑦「大宇部」「宇部先輩列伝7佐々木貞介」（昭和十三年五月十日）
⑧「大宇部」「宇部に於ける著述解題5磐湖集　岬小學校菁莪堂文庫蔵」（昭和十三年六月十日）
⑨阿知須町編・塚本小治郎編纂主任『阿知須町郷土誌』「佐々木向陽、佐々木松墩」（昭和十六年）
⑩「大宇部」「紙上博物館郷土」（31）「佐々木先生標疏蒙求三巻　某氏蔵」（昭和十七年十月十五日）
⑪山田亀之介『宇部郷土史話』（昭和三十年、宇部郷土文化会）
⑫吉田祥朔『近世防長人名辞典』（財団法人山口県教育会、昭和三十二年）
⑬宇部市史編纂委員会『宇部市史』「通史篇」（宇部史編纂委員会、昭和四十一年）
⑭「防長新聞」「わが町わが村の明治維新」「福原家の文学者佐々木向陽その1～3」（昭和四十三年、一月三十一日、二月二日、五日）「その2」に中野真琴の見解（⑮掲載の記述と同じ）を紹介。
⑮中野真琴『あじす史話』（阿知須町役場、昭和四十四年）
⑯笠井助治『近世藩校に於ける学統学派の研究』下「佐々木向陽」（吉川弘文館、昭和四十五年）
⑰江口茂一兵衛「佐々木向陽と佐々木松墩について」（『宇部地方史研究』三号、宇部地方史研究会、昭和四十九年）
⑱江口茂一兵衛「佐々木向陽」（『宇部地方史研究』五号、宇部地方史研究会、昭和五十一年）
⑲藤村忠明「佐々木松墩先生の経歴について」（『山口県地方史研究』四十五、山口県地方史学会、昭和五十六年）
⑳阿知須町史編さん委員会『阿知須町史』（阿知須町、昭和五十六年）
㉑藤村忠明「佐々木松墩先生の遺稿その他における疑問点の解明について」（『宇部地方史研究』十三、昭和六十年）
㉒宇部市史編集委員会『宇部市史』「史料篇」上巻、（宇部市、平成二年）
㉓宇部市史編集委員会『宇部市史』「通史篇」上巻（宇部市、平成四年）
㉔市古貞次他編『国書人名辞典』第二巻（岩波書店、平成七年）
㉕工藤孝雄「佐々木松墩墓碑銘を読む」（『あゆみ』三号、阿知須郷土史研究会、平成十六年）
㉖森川潤「青木周蔵の渡独前の修学歴（2）―漢学の修業時代―」（『広島修大論集』第五〇巻第二号、平成二十二年）

それぞれの先行研究が挙げる標疏本以外の著述類が以下である。本稿では、内容から「歴史書」、「漢詩・和歌」に分類して提示し、調査で所在確認できたものは、その説明を加えた。

「歴史書類」

○『逸史俚諺』（中井竹山『逸史』の訳、国立国会図書館蔵を確認。）②

○『日本逸史』十二冊（中井竹山『逸史』を訳した筑波大学附属図書館所蔵の佐々木向陽『竹山逸史』十二冊を確認。）④⑨⑭⑮⑳

○『歴代武将傳』（未確認）②
○『日本外史俚言抄』（未確認）⑫⑯㉔㉖

「漢詩・和歌類」

○『拭櫛集』（『佐々木松墩遺稿集』前編所収。国立国会図書館蔵を確認。向陽の漢詩・和歌集で標疏本校訂や尊皇攘夷を詠じた作品がある。）②
○『錫類集　并付録』藤田恭撰（山口県立山口図書館蔵を確認。領内の烈女阿英を学生たちが詠じた漢詩集で向陽の跋がある。）⑥。⑨⑭⑮⑯⑳は、『類錫集』と表記している。
○『磐湖集』藤田草湖撰、瀧原老松纂集（山口県立山口図書館蔵を確認。向陽の十一首を含む漢詩集。）⑧
○『爭鹿稿』（牧氏蔵。未確認。学生の漢詩を向陽が添削した草稿。）⑤

一、本稿の目的

さて、以上の内容を比較・検討していくと、次の三つの問題点があった。

1　②は、向陽の墓誌銘を採録し、他の先行研究が言及していない著述類を記し、内『拭櫛集』と『逸史俚諺』は現存確認できた。しかし、②を佐々木向陽伝の参考資料として挙げる先行研究は見当たらない。

2　④⑨⑭⑮⑯は、向陽が十三歳の時（⑯は、十三四歳）、熊本に来た頼山陽とその宿泊先で邂逅し、山陽が加藤清正の碑文を草する時に、居合わせたとしている。(注3)

また、④⑨⑭⑮は、山陽が清正を詠じた「詩文」中の出典を向陽だけが指摘でき、周囲が学識に驚嘆したとしている。「詩文」名を挙げる先行研究はないが、本稿筆者が調べた所、山陽が熊本で清正を詠じた作に「謁加藤公廟」二首、「重謁加藤肥州廟引」があった。しかし、山陽が熊本に来た時期と向陽の生年を付き合わせると、その年齢は「十三（四）歳」にはならず、再検討が必要と考えられる。(注4)

3　⑭⑮から、向陽が「熊本藩文学教授辛島氏に学んだ」という記述が加わるが（⑳が踏襲）、その根拠が示されていない。さらに、その後、⑯が「藩校時習館教授辛島塩井の門に入って朱子学を研修」、㉔が「辛島塩井の門に学び」、㉖が「藩学時習館教授辛島塩井の家塾に入門」とするなど、「辛島塩井」門に学んだことが定説化していく。(注5)そこで、本稿筆者は、これらの説を裏付ける資料（向陽と辛島氏の直接的関係を示すもの）を調査したが、まだ把握できていない。ただ、問題点2と関連して、頼山陽が熊本に来た際、亡父の友辛島塩井を訪ねており、旅館で塩井やその場にいた諸儒に「熊府辛島教授招飲。先人之友也。賦之奉呈、并贈在座諸儒」詩を贈り、続いて清正を詩に詠じたことが分かった。向陽と頼山陽との邂逅があったとすると、頼山陽を通じ、向陽と辛島塩井に間接的な繋がりがあったことにはなるが、先行研究では言及していない。

以上の状況を受け、本稿では紙面の都合上、まず、1を取り上げる。具体的には②の著者（三井誠之進）を紹介し、続いて『佐々木向陽先生傳』全文の紹介・語釈・補足説明・通釈を試みた。今回、同資料を所蔵している山口県立山口図書館の許諾を得て、写真データによる資料紹介が可能となった（図版1）。深く感謝申し上げる。2、3については稿を改めて述べる。

二、三井誠之進について

三井誠之進稿『佐々木向陽先生傳』は、三井本人が山口県立山口図書館に寄贈しているが、図書館によると、その際の記録や他の寄贈書は無い、とのことであった。三井家は仕えていた毛利氏が防長に移封した際、矢弓を捨て商人となり、寛文八年（一六六八）に酒造業を始めた。十三代三井誠之進は、明治十年（一八七七）三月に生まれ、東京大学を卒業後、郷里床波で家業の傍ら郷土史の研究をした。

また、三井は、明治三十七年（一九〇四）に錦波小学校校友会が校内に図書閲覧室（後に私立西岐波文庫と改称）を設置する事業に尽力し図書六〇三冊、雑誌十七種を寄贈している。(注6)

三、『佐々木向陽先生傳』

【本稿の凡例】

1　句読点が記されていないため補った。

2　濁点がないものは、そのままとした。

3　会話部分には、「　」を付した。

4　書名には、『　』を付した。

5　墓誌銘は、書き下し文も付した。

先生ハ長崎ノ士、諱ハ珏、名ハ景衡、字ハ圭甫、通稱並枝、向陽ハ其號ナリ。享和元年辛酉四月二十一日、勝木家ニ生ル。後、醫家佐々木氏ニ養ハル。先生壯歳京都ニ上リ、醫術ヲ研メント欲シ、途次、赤間関ヲ過キ暫ラク留マリテ醫ヲ業トセシカ、岐波浦ノ人伊藤吉郎外二三者、其地ニ醫ナキヲ以テ先生ニ請ヒ、阿知須ニ伴ヒ歸ル。阿知須ノ人江口茂兵衛、先生ノ學アルヲ知リ、有志ト共ニ、就テ漢籍ノ教授ヲ受ク。後、先生、茂兵衛ノ家ニ寓シ、村民ニ教ユ。先生、村民ノ素養ナキヲ慨シ、先ツ馬琴等ノ假作本ヲ阪地ニ求メ、教科書トナシ、次テ日記故事等ノ平易ナル漢籍ニ及ホセリ。茂兵衛、女ヲ以テ先生ニ娶ハス。先生、遂ニ素志ヲ翻シテ阿知須ニ留マリ、專ラ教授ノ事ニ従フ。時ニ床波三井東兵衛ハ風雅ノ士ナリ。先生ト親ミ善シ。西光寺通明加藤仙吉、白石仲菴等、東兵衛ヲ介シテ、先生ニ請フニ、毎月一回床波ニ来リ、教授センコトヲ以テス。先生、是ヨリ屢々床波ニ来リ、加藤仙吉ノ家ニ講莚ヲ開ク。有志、参聴、大ニ得ル所アリ。

當時宇部邑君福原氏尚幼ナリ。當職飯田勘兵衛等、邑ニ良師ナキヲ慨シ、復東兵衛ヲシテ先生ニ請ハシメテ曰ク「先生、祿ノ少ナルヲ厭ハスンハ、願クハ宇部邑ニ来リテ子弟ヲ教授セヨ。邑ハ先生ヲ遇スルニ、儒臣ヲ以テセン」ト。先生曰ク「予カ不敏ヲ以テ一邑ノ儒臣トナル、

是レ榮ナリ。祿ノ多少ハ固ヨリ問フ所ニアラズ」ト。是ニ於テ招聘ノ事決ス。是ヨリ、先生、毎月日ヲ定メテ邑ノ講堂ニ臨ム。定日ニハ必ス出勤シ、風雨ヲ厭ハス。講堂ヲ菁莪堂ト名ケ、記ヲ作リテ堂ニ掲ケ、別ニ諸生ノ為メニ規則ヲ制シ、亦之ヲ掲ク。邑ノ子弟来リ学フ者多シ。是ヨリ一邑ノ學風大ニ興起ス。後、先生、宇部ニ移住シ、遂ニ其地ニ終ル。享年六十三。実ニ文久三年癸亥十一月十五日ノ夜ナリ。字山門（ヤマカト）ノ墓地ニ葬ル。先生、人ト為リ温厚篤實、君子ノ風アリ。嘗テ『蒙求標疏』ヲ作ル。世ニ行ハル。其詩歌ヲ輯メテ『拭櫛集』トイフ。別ニ未刊ノ著『逸史俚諺』、『歴代武将傳』アリ。惜シムラクハ、今、散逸シテ僅ニ其一部ヲ残スノミナルヲ。

先生一女アリ。八重子トイフ。才色アリ。須佐ノ人荻原時行ヲ養フテ子トナシ、儒業ヲ嗣カシム。時行、後、貞介ト称シ、松墩ト號ス。詩文ヲ善クス。明治七年三月廿六日、病ヲ以テ京都ニ没ス。年五十一。松墩没後、八重子、母ト共ニ山口ニ寡居ス。山口師範学校女子部ノ設置セラルルヤ、其舎監ニ奉職ス。晩年、郷里阿知須ニ歸リ、吟詠自ラ娯ム。子ナシ。江口某ヲ養フテ嗣トナス。明治四十五年三月十一日七十九歳ニテ病没ス。

付録　向陽佐々木先生墓誌銘

先生姓源諱玷名景衡字圭甫通稱並枝向陽號也父勝木氏長崎豪族享和元年辛亥酉生先生壮歳来防州鯵州時本邑宇部士請先生受教於晩成學舎丙午三月邑君辟命賜俸秩以為菁莪堂教授癸亥冬疾痰咳而卒實文久三年十一月十五日夜也享年六十三葬本邑不浪池之南陵銘云

瓊浦之瓊飛入長陽潤々厥質瑛々厥光文理密察山高淵深徳量寛容天宏海涵韜匱不沽式全清潔其質雖亡其究何滅

佐々木松墩撰　河内淡哉書

語釈・補足説明　○勝木　先行研究④⑰⑱⑳㉖は、「勝木」とする。⑪は、「勝木」と記す墓誌銘を紹介。⑨⑭⑮⑯㉔は「直木」とする。（⑭は、⑪筆者山田の「直木姓が正しいかも知れない」との生前の話を紹介。）⑰⑱の筆者江口茂一兵衛（向陽の妻江口岸の兄江口茂兵衛の孫）は、自身がかつて「直木」としていた向陽に関する記録が⑨の編纂主任の塚本に渡っていること、塚本がそれに拠ったか他に拠ったかは未定であることを述べている。また、⑱は、佐々木正介（向陽の曽孫）からの手紙の内容、すなわち、正介の祖母で向陽の娘八重が「父向陽の実家は長崎の勝木家と語った」ことを伝えている。また、④⑨⑭⑮⑯⑳㉔㉕は、向陽の生家が通事（詞）であり、向陽が朝鮮・中国・オランダなどの言葉に通じていたとする（⑳は、後者の記述無し）。○醫家佐々木氏ニ養ハル　⑨⑭⑮⑯㉔㉖は、福原氏が招聘を可能にするため領内の佐々木家を継がせたとする。(注7)○壮歳京都ニ上リ、醫術ヲ研メント欲シ　佐々木向陽と医業について、④⑨⑭⑮は、阿知須で漢学教育の傍ら医業を行ったことのみ記す。○赤間関　下関。図版2参照。○岐波浦ノ人伊藤吉郎外二三者～阿知須ニ伴ヒ歸ル　岐波浦は図版2参照。⑨⑭⑮⑱⑳㉖は海路で乗船が難破し丸尾港へ上陸したとする。○女ヲ以テ先生ニ娶ハス　④は同じく「女」（娘）とするが、⑨⑭⑮⑱⑳㉖は「妹」とする。○西光寺　三井酒造の裏山にあった寺。床波浦の多くが門徒となっている。○加藤仙吉　⑱に向陽の門下とし

て「加藤千吉床波の人」とある。○毎月一回床波ニ来リ　阿知須浦から床波浦まで岐波浦を経由して一里半。図版2参照。　○當職　藩の中で財政や地方の政治を取りしきった最高責任者。○菁莪堂　⑳は、『詩経』小雅「菁莪」に拠り人材育成の意気込みを表す、とする。○瓊浦　長崎の異称。○瓊玉　ここでは、優れた人材。向陽を指す。○長陽　防長。ここでは佐々木向陽が住んだ地を指す。山口文書館所蔵『長陽年代記智・仁・勇』の解説に「防長両国の主要事件等の記事を編年に配列したもの。」とある。○潤々　光沢がある様。○瑛々　透き通る様。○文理密察　筋道だった文章が精緻に考えられ分別があること。『礼記』「中庸」に「文理密察、足以有別也」とある。○徳量寛容　有徳の器量が広く人を受け入れること。○韜匱不沽　『論語』「子罕」の「子貢曰有美玉於斯、韞匱藏諸。求善賈而沽諸。子曰沽之哉。我待賈者也。」に拠る。これについて包咸は「不衒賣之辭」とする。美玉を箱に入れ良い買い手を待って売る（衒って売らない）こと。ここでは、美玉を向陽に喩える。○全清潔　清廉潔白を貫くこと。○其質　身体。○其究　学究の業績。

付録　墓誌誌銘の書き下し文（注8）

先生、姓は源、諱は玷、名は景衡、字は圭甫、通称は並枝、向陽は号なり。父勝木氏は長崎の豪族なり。享和元年辛酉生まる。先生、壮歳にして、防長州鯵州に来る。時に本邑の宇部の士、先生に請うて教えを晩成学舎に受く。丙午三月、邑君、辟命して俸秩を賜ひ以て菁莪堂の教授と為す。癸亥冬、痰痎を疾んで卒す。実に文久三年十一月十五日夜なり。享年六十三。本邑不浪池の南陵に葬る。銘に云はく、瓊浦の瓊飛びて長陽に入る。潤々たる厥の質、瑛々たる厥の光。文理密察なること、山と高く淵と深し。徳量寛容なること、天と宏く海と涵し。匱に韜めて、沽らず。式て清潔を全うす。其の質は亡ぶと雖も其の究めしは何ぞ滅っせん。

全文通釈

佐々木向陽先生は長崎の人で、諱は玷、名前は景衡、字は圭甫、通称は並枝で、向陽はその号である。享和元年（一八〇一）辛酉四月二十一日に勝木家に生まれた。後に、医者の佐々木家で養われた。先生は、若い頃、京都に上って医術を究めようとしたが、途中、赤間関（下関）を過ぎて暫くそこに留まって、医業に携わっていると、岐波浦の伊藤吉郎他、二三人の者が医者がいないからと先生に頼み、阿知須に伴って帰った。阿知須の江口茂兵衛という人は、先生に学識があることを知って、有志と一緒に先生に漢籍の教授を受けた。その後、先生は茂兵衛の家に住んで、村人に教授した。先生は、村人が漢籍の素養が無いことを嘆き、まず、曲亭馬琴などの戯作本を大阪の地に求めに行き、教科書とした。次に、教授は日記や故事などの平易な漢籍に及んだ。茂兵衛は娘を先生に娶せた。先生は、とうとう元来の志を翻して阿知須に留まり、専ら教授に従事した。

その頃、床波の三井東兵衛という風雅な人士がおり、先生と親しくしていた。西光寺・通明加藤仙吉、白石仲菴などが、東兵衛を介して、先生に毎月一回床波に来て教授して欲しいと頼んだ。先生はこれより

度々床波に来て、加藤仙吉の家で講義をした。有志が参加して聴き、大変収穫があった。

当時、宇部村の君主である福原氏は、まだ幼かった。当職飯田勘兵衛らは、宇部村に良い教師がいないことを嘆き、また、東兵衛を介して先生に「先生、俸禄が少ないことを厭わないのであれば、宇部村に来て子弟を教授して頂きたい。先生を儒学を以て仕える家臣として処遇したいと思う。」と尋ねさせた。先生は「私は才知・才能に乏しいが、それでも一邑の儒臣となるのは、栄誉です。俸禄の多少は、もとより関係ない。」と答えた。そこで、先生の招聘が決定した。これより、先生は、毎月、日を決めて村の講堂にやって来た。定日には必ず出勤し風雨を厭わなかった。講堂は、菁莪堂と名付け、記を作って堂内に掲げ、その他に生徒たちのために規則も制定して掲げた。

多くの子弟が学びにやって来た。これより、宇部村の学風は大いに興隆した。後に、先生は宇部に移り住み、そこで生涯を終えた。享年、六十三歳、亡くなったのは文久三年（一八六三）癸亥十一月十五日の夜であった。字山門の墓地に葬られた。先生の人柄は温厚篤実で君子の風格があった。嘗て、『蒙求標疏』を著し、世に流行した。詩歌を集めて『拭櫛集』と称した。別に未刊の著で『逸史俚諺』、『歴代武将伝』があったが、惜しいことに、今は散逸し一部が残っているだけである。

先生には一人娘がいて、八重子と言った。才色兼備であった。須佐の人で荻原時行を養子として儒学者としての後を継がせた。時行は、後に貞介と称し、松墩と号した。詩文が得意であった。明治七年（一八七四）三月二十六日に病のため京都で亡くなった。五十一歳であった。松墩没後は、八重子は母親と共に山口で一人身で暮らした。山口師範学校の女子部ができると、その学舎の監督として奉職した。晩年は、郷里の阿知須に戻り、詩を吟詠することを愉しんだ。子供はいなかった。江口某を養子とした。明治四十五年（一九一二）三月十一日、七十九歳で病死。

付録　向陽佐々木先生墓誌銘

先生、姓は源、諱は玷、名は景衡、字は圭甫、通称は並枝、向陽は号といった。父勝木氏は長崎の豪族であった。享和元年辛酉に生まれた。先生は、壮歳にして、防長州鯵州（阿知須）に来た。時に本邑の宇部の士が先生にお願いして晩成学舎で教えを受けた。丙午三月、邑君が命じて召し出し俸秩を与えて菁莪堂の教授とした。癸亥、痰痎の病で亡くなった。実に文久三年十一月十五日夜であった。享年六十三。本邑の不浪池之南陵に葬られた。その墓誌銘には、次のようにある。

瓊浦（長崎）から瓊（たま）のような逸材（向陽先生を指す）が、長陽（防長）に飛び来た。その為人は、まるで光沢のある玉が透き通った光を放っているようであった。『礼記』「中庸」に、文章は筋道だって精緻で分別があると言うが、先生もそうで、まるで山のように高く淵のように深みがあった。その有徳の器量は広く人を受け入れ、それはまるで天のように広く海のように深みがあった。『論語』「子罕」によると、子貢が孔子に、美玉があるとして、それを箱に入れしまっておくか、商人に売るかと尋ねた際、孔子は良い買い手を待つ（名君を待って仕える）と答えたが、先生もそのようにされ、清廉潔白を貫かれた。そ

の身体は亡んだとしても、究めた業績はどうして滅びることがあろうか、いや滅びはしない。

佐々木松墩撰　河内淡哉書

おわりに

『佐々木向陽先生傳』は、向陽が学問教授に通った床波に代々続く三井家十三代目三井誠之進によって記され、向陽の著述類として、先行研究が言及していないが、現存している『拭櫛集』、『逸史俚諺』を挙げており、向陽伝記の資料として、参考にすべき所がある。同時に、他の先行研究とは、**語釈・補足説明**で指摘したような違いがあり、今後、「はじめに」で指摘した[2]、[3]と併せて考察を深めたい。

また、佐々木向陽が「どのような人物」であったのかについては、先行研究で詳しく述べられ、定説化している部分もあるが、今一度、郷土史研究に於いて「どのように語られた人物」であったのか、それが何を意味しているのか、という視点からの再考も必要であろう。

注

1　詳細については、「佐々木向陽『標疏箋注蒙求校本』に関する一考察」（『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』九、平成二十六年）一～十三頁参照。

2　相違の詳細は後の**語釈・補足説明**参照。先行研究には、吉田松陰に学んだ後、向陽門の養子となった佐々木松墩も含む。

3　㉖は頼山陽と親交があることのみを記述。

4　水田紀久・頼惟勤・直井文子校注『菅茶山・頼山陽詩集』（岩波書店、平成八年）一九四～一九六頁、安藤英男『訳註頼山陽詩集』（白川書院、昭和五十二年）八十八～一一二頁参照。

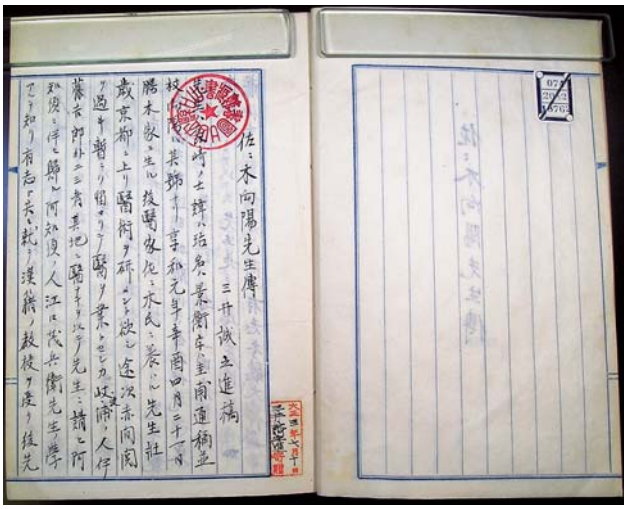
5　⑯が挙げている参考文献は「日本教育史資料巻九・山口県教育史上・防長人名辞典・宇部市史」で、本稿の①③⑫⑬に該当すると思われるが、それらに辛島塩井の記述は無い。㉖は、向陽が学頭に着任して「晩生堂」を「菁莪堂」と改称したことについて、「時習館における学課課程の最終段階は菁莪斎と称する」、「熊本の辛島塩井のもとでまなんだ向陽が、菁莪斎にちなんで改称したものとおもわれる。」と述べている。五十九頁参照。

6　『私立西岐波文庫一覧自明治四十四年一月至明治四十四年十二月』（私立西岐波文庫、明治四十五年三月）一頁、大橋良造『山口県史』下巻（山口県史編纂所、昭和九年）、三二四頁、西岐波地区ふるさと運動実行委員会『ふるさと西岐波地域篇・床波』（宇部市西岐波公民館、昭和六十三年）、二十二頁参照。

7　⑱は、これを江口氏の計らいとする。

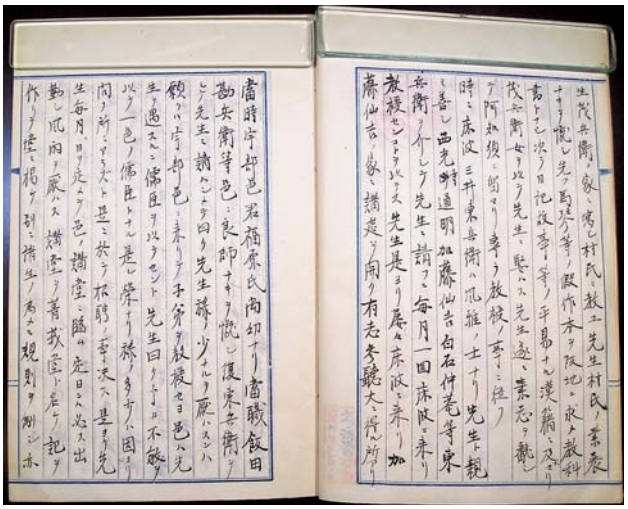
8　手稿「佐々木向陽墓誌」（山口県文書館蔵田村哲夫文庫）、⑪の一九四頁を参照。

図版1　三井誠之進『佐々木向陽先生傳』（山口県立山口図書館蔵・24cm・写本和装）より

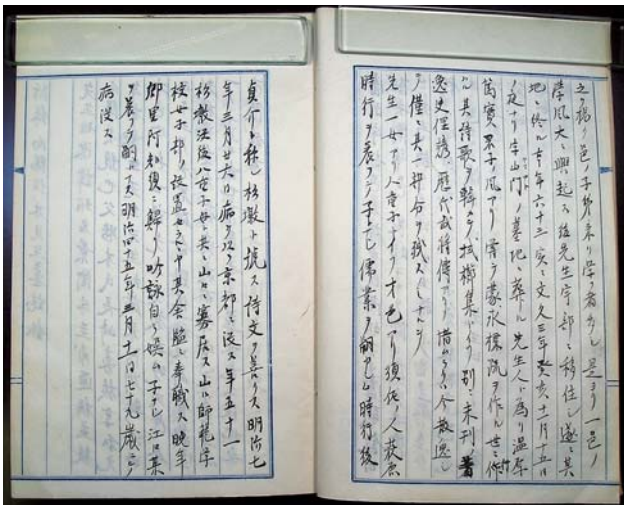


佐々木向陽先生傳　三井誠之進稿

校長　其師ナリ享和元年幸酉四月二十一日
陽木家ノ生ル後醍醐帝ノ末裔ニ永氏ニ養ル先生壯
歳京都ニ上リ醫術ヲ研ミ欲モ途沢茶同風
ヲ過キ暫ラク留リテ醫ヲ業トセシカ岐陽ノ人伊
藤元衛ハ学ニ考ヒ其地ニ隠キテ以テ先生ニ請ヒ所
知識ニ伴ヒ尊ル所知識ノ人江ニ茂兵衛先生學
ヲ知リ有志ニ共ニ就テ復籍ノ教授ヲ受ル後先

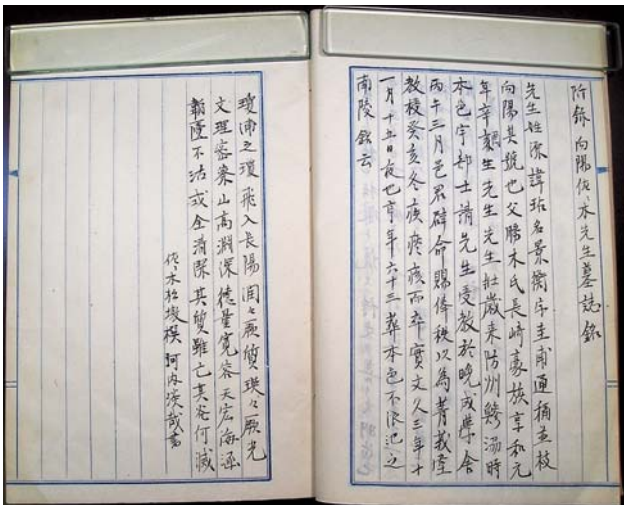


生茂兵衛ノ家ニ寄シ村民ニ教ヘ先生村民ノ素養
ナキ慨シ先ヲ馬琴等ノ戯作本ヲ販地ニ求ム藏科
書トモ次ヲ日記教授等ノ平易ナル漢籍ニ及ヒ
茂兵衛ハ以テ先生ニ娶ハシ先生遂ニ素志ヲ敷シ
テ阿知須ニ留リ幸ヲ教授ノ業ニ従フ
時ニ床波三井東吾衛ノ風雅ノ士ナリ先生ト親
キ善シ西先輩通明加藤仙吉白石伊老等東
兵衛ヲ介シテ先生ニ請フ毎月一回床波ニ来リ加
教授セントスル先生是ヨリ屢々床波ニ来リ加
藤仙吉家ニ講授ヲ開ク有志多聽大ニ慨所ノ



當時宇部邑君稲葉氏南幼ナリ當職飯田
勘兵衛等邑ニ良師ナキヲ慨シ復来兵衛ヲ
シテ先生ニ請ハシメ曰ク先生藩少ナルヲ厭ハスン
願ハ宇部邑ニ来リテ子弟ヲ教授セヨ邑人先
生ヲ迎ヘ儒臣トナル是榮ナリ移ラサル因リ
問ヲ所ニ安ンスト是ニ於テ不時ニ至ル先
生毎月日ヲ定メテ邑ノ講堂ニ臨ム定日ニ必ス出
勤風雨ノ厭ハス講堂ヲ青蔵堂ト名ケ記ヲ
作リ堂ニ掲ケ別ニ諸生ノ為ニ規則ヲ別ニ示

之ヲ藩ノ邑ノ子弟来リ学者多シ是ヨリ一邑ノ
学風大興起ス後先生宇部ニ移住シ遂ニ其
地ニ終ル吉年六十二安政二年文久三年癸亥十月十五日
定ヨリ宇山門ノ墓地ニ葬ル先生人ト為リ温厚
簡寡黙ヲ風ヲ常ニ標風ヲ作ル世俗
ル其詩歌ヲ編ス拙樹集ヲ刊ス未刊著
述史伝論歴代武將傳ヲ諸ス今散逸シ
ヲ惜ム其一世石ヲ拭人ニ才ヲ才色ヲ須臾人教養
先生一世ヲ人達ヲ才色ヲ須臾人教養
時行ヲ長ヲ子ヲ子ヲ儒業ヲ紹ル時行後



附録 向陽仮木先生墓誌銘

先生姓源諱琢名景獨字主甫通稱主殺
向陽其號也父勝木氏長崎高橋享和元
年辛酉生先生先生壯歳来防州鶏湖時
本色宇都士清先生受教於晩成學舎
丙午三月色衆辟命賜俸秩以為著義隆
教授癸亥冬疾疫而卒實文久三年十
一月十五日夜也享年六十三葬本色不浪池之
南陵銘云

瓊浦之瓊飛入長陽同之厥使瑛々厥光
文理密案山高淵深德量寛容天宏海涵
翰墨不枯或全清深其筴雖亡其花何臧

仮木壯墩撰 阿内宏哉書

図版2 「防長古図」（山口県立山口図書館蔵）より

注 地図の赤色矢印は本稿筆者に拠り、それぞれ左記の地名を指している。なお、3と4の間に、「丸尾崎」、「岐波浦」がある。

1 赤間関
2 宇部
3 床波浦
4 阿知須

（きりしま かおるこ：日本語・日本文学科 教授）